

研究ノート

看護におけるフィジカルアセスメント研究の動向 (2001年～2005年)

城生弘美¹⁾・松田恵理²⁾・中下富子³⁾・一戸真子⁴⁾

A Trend in Japanese Literatures for Physical Assessment in the Field of Nursing (2001 to 2005)

Hiromi JONO¹⁾, Eri MATSUDA²⁾, Tomiko NAKASHITA³⁾, Shinko ICHINOHE⁴⁾

キーワード：フィジカルアセスメント、国内文献、看護、研究

I. はじめに

わが国においてフィジカルアセスメントが大学教育に導入されたのは1996年（平成11年）聖路加看護大学においてである¹⁾と言われている。その後太田らの全国調査（平成11年度）において、大学教育の81.1%がフィジカルアセスメントを何らかの方法で教育している実態が明らかにされた²⁾。看護基礎教育が急速に大学教育化されていることが大きく影響し、フィジカルアセスメントが急速に浸透してきている。

一方最近、日野原は「医学教育で医学生や卒業研修医が修得するような診断の知識と技術に匹敵する臨床能力が、21世紀の臨床ナースには要請されている³⁾と明確に看護師のフィジカルアセスメント能力向上を目指すよう指摘している。臨地の場で活動する看護職者が会得している能力としてフィジカルアセスメントが求められ、臨床能力を一層向上させる必要があると言える。

そこで今回、フィジカルアセスメントに関する看護研究の動向を検討することにより、現在何が明らかにされ、何が明らかにされていないのかについて把握するために、具体的な研究内容を把握することを目的とした。そして看護職者の臨床能力向上のために、今後のフィジカルアセスメント関連の研究の方向性を得ることとする。

II. 研究目的

フィジカルアセスメントに関連する看護研究は、現在どの領域でどのような目的に対し、どのような方法で実施されているかについて明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象文献

医学中央雑誌（以下、医中誌と称す）の検索サイトを活用し、「フィジカルアセスメント」「ヘルスアセスメント」「看護」をキーワードとし、2001年から2005年までの5年間を抽出したところ27件検索された。検索された論文の中から、研究としての体裁を整え論文として成立するもの13件について全て取り寄せ、分析対象とした。

2. 分析方法

13文献の文献カードを作成し、以下の4パターンで13文献を分析した。

- 1) 年代別の研究論文数
- 2) 研究目的と研究対象
- 3) 研究対象と研究方法
- 4) 研究方法と検討方法

1) 群馬バース大学保健科学部看護学科 2) 群馬大学大学院保健学専攻 3) 埼玉大学教育学部 4) 上武大学看護学部

IV. 結 果

1. 発表年代別の対象論文数

医中誌にて検索され本研究対象論文数13件は、2002年2件、2003年7件、2004年4件であり、2003年が最もフィジカルアセスメント関連の看護研究論文が発表されていた。

2. 研究目的と研究対象について（表1）

研究目的は表1に示す通り、「教育評価を明らかにする」もの9件、「臨地場で使われているフィジカルアセスメント項目を明らかにする」もの2件、「アセスメント項目を用いて医療機関利用者の変化を明らかにする」もの1件、「既存書籍内での記述状況を把握する」もの1件、といった4つの分野に分かれた。中でも「教育評価」を目的としたものは研究対象が全て「看護学生」であった。「臨地場で使われているフィジカルアセスメント項目を明らかにする」目的のものは現場の看護職者を対象とし、「医療機関利用者の変化の把握」を目的とした研究はアセスメント項目を用いて利用者の変化を把握する研究であった。また、既存の書籍を対象とし「フィジカルアセスメントの記述内容」の量を分析する研究もあった。

3. 研究対象と研究方法について（表2）

研究対象を看護職者にしたものは表2に示す通り、

質問紙や混合法（質問紙と面接法）が用いていた。また看護学生に対しては看護職者と同様に質問紙における調査が行われていたのに加え、テスト・レポート・技術演習時の評価表・自己評価を用いて分析する方法が取られていた。さらに医療機関利用者や書籍を対象とした研究では、既存の診療録や書籍が用いられていた。

4. 研究方法と検討方法について（表3）

表3に示す通り、13件中9件が記述的な検討方法を用いてデータ分析を行い、残りの4件が比較検討を行うことでデータ分析を行っていた。

記述検討を行った研究方法は「学習評価」が5件、「質問紙法」が2件、「混合法」と「既存資料」がそれぞれ1件であった。

比較検討を行った研究方法は「学習評価（テスト・レポート・技術評価表・自己評価）」が3件、「既存資料」が1件であった。

研究方法と検討方法別による研究概要をみると、記述検討を行った研究方法は、学生が対象者である場合「基礎実習中167のフィジカルアセスメント項目を『実施した』から『実施しなかった』までを4段階で問う」「フィジカルアセスメントの授業評価（授業構成・授業展開・教員の関わり）の5段階評価」「模擬患者に対するフィジカルアセスメント演習後のレポートの質的分析」「学生6名を無作為抽出し、授業終了後一ヶ月経

表1 フィジカルアセスメントに関する文献の研究目的と研究対象

(n=13)

研究目的	研究対象				計
	看護職者	看護学生	医療機関利用者	既存の文献書籍	
教育評価	0	9	0	0	9
現場で使われているフィジカルアセスメント項目の実態	2	0	0	0	2
医療機関利用者の変化	0	0	1	0	1
既存書籍内の記載状況	0	0	0	1	1
計	2	9	1	1	13

表2 フィジカルアセスメントに関する文献の研究対象と研究方法

(n=13)

研究対象	研究方法			既存資料	計
	質問紙法	混合法 (質問紙と面接)	学習評価 (テスト・レポート・ 技術評価・自己評価)		
看護職者	1	1	0	0	2
看護学生	1	0	8	0	9
医療機関利用者	0	0	0	1	1
既存の文献書籍	0	0	0	1	1
計	2	1	8	2	13

表3 フィジカルアセスメントに関する文献の研究手法と検討方法

(n=13)

検討方法 研究方法	比較検討	記述検討	計
質問紙法	0	<p>研究対象: 2002年度2年生45名、基礎看護学実習Ⅲ終了時。研究方法: 選択式質問紙による調査(記名式)。内容は167項目のフィジカルイグザミネーションについて「実習中に行った」「必要があったが行わなかった」「必要があるかどうか分からない」「行う必要がなかった」のいずれかを選択する。また実習担当教員に対して学生の受け持った対象者に「必要であった」「フィジカルイグザミネーションについて尋ねた」。</p> <p>研究対象: 3つの県の訪問看護ステーションに就業中の看護師のうち同意の得られた283名。研究方法: フィジカルアセスメント34項目各々に関して、知識・使用頻度・ニーズの3側面についてそれぞれ5段階の選択肢から選択した。各項目ごとの知識・使用頻度・ニーズの相関分析を行い、さらに看護経験年数により2群(看護経験13年未満とそれ以上・医療機関での看護経験10年未満とそれ以上・訪問看護経験3年未満とそれ以上)に分け、差の検定を行った。</p>	2
混合法 (質問紙と面接)	0	<p>研究対象: 高齢者フィジカルアセスメント教室に参加した高齢者看護に携わる看護師30名 研究方法: 半構成的質問紙(フィジカルアセスメントのうち習得したいと思っている項目、学びを深めたい身体部位、高齢者のフィジカルアセスメントを行う上で困難に感じていること、フィジカルアセスメント技術向上を目指す上で取り組もうと思っていること。)面接(4名の看護師のグループインタビュー、2ヶ月に1回、計7回実施)。</p>	1
学習評価 (テスト・レポート・技術評価・自己評価)	<p>研究対象: フィジカルアセスメントの授業を受けた短大生2001年97名・2002年89名・2003年93名 研究方法: 教員による学生の学習態度評価表(学習課題の発見、統合学習、自己学習、対人技能の4つの学習要素で構成される20項目を5段階評価)、実技評価表(実技評価の合否判定に使用。患者への配慮、各診察技術について4段階または3段階で評価)。各年度ごとの平均点を統計学的に比較、学習態度評価点と実技評価点の相関関係、課題別の平均点を比較する。</p> <p>研究対象: 「看護過程とヘルスアセスメントⅠ」を履修し、調査に同意した看護学科2年生89名。研究方法: フィジカルアセスメント関連科目全てが終了した後、①授業過程評価スケール(船島なをみら作成の「授業過程評価スケール-看護技術演習用-5段階評価」を使用)②身体診査自己評価表(13系統「バイタルサイン」「皮膚・爪」「頭頸部」「眼」「耳」「鼻」「口腔」「呼吸器」「循環器」「乳房」「腹部」「神経」「筋・骨格」、66項目から構成、「自信をもってできる」から「かなり不十分である」までの5段階評価)を提出させ、各項目の記述統計と前年度との比較検定を実施した。</p> <p>研究対象: 看護学科3年生75名。研究方法: 成人老人看護Ⅱ実習の開始後2日または3日目に生体シュミレーター「イチロー」を用いて演習を行い、演習の直前と直後に20分をかけてテストを行う。演習前日には半数の学生が手術部を残りの半数の学生がICUを見学している。また、演習終了後に16項目からなる自己評価表を用いて自己評価を行った。項目ごとに評価の割合を出し、テスト結果との相関を検討した。</p>	<p>研究対象: 2002年度「フィジカルアセスメント」を履修した現役2回生79名、編入3回生12名、編入4回生2名、計93名。研究方法: 「フィジカルアセスメント」最後の演習終了時に自記式調査用紙(無記名)にて行った。内容は、①講義構成について②講義・演習の展開について③演習時の複数教員の関わりについて④看護師患者役割経験について⑤事前学習用資料について⑥配布資料の有益性について⑦事前学習において教員を活用できたかについて⑧演習時に教員を活用できたかについて⑨教師のかかりやすさについて⑩新しい知識が得られたかについて⑪専門職者としての態度が身についたかについて⑫教材は適切に活用されたかについて⑬全体を通して科目にまとまりがあったかについて⑭学習内容は興味深かったかについて⑮さらに学習し続けたいかについて⑯満足度について、であった。これら各々に「まったくそう思う」から「大いにそう思う」までの5段階リカースケールで質問した。</p> <p>研究対象: 看護学科2年生89名。研究方法: 学生が模擬患者演習終了後に記述したレポート内容の「学んだこと」「気づいたこと」「実施して困難であったこと」「今後の課題」について、意味内容が類似している表現を整理し、カテゴリを抽出・分類した。</p>	8
既存資料	<p>研究対象: 老人病院で抑制されていた17例(抑制群)と抑制をされたことのない66例(非抑制群)。研究方法: 高齢者アセスメント表を用いて、抑制群と非抑制群の変化(効果)を比較した。</p>	<p>研究対象: 2001年度と2002年度に「フィジカルアセスメントに関する科目、基礎看護援助技術の科目を受講し、基礎実習に出た学生167名。研究方法: 作成した調査用紙を配布し、実習終了後に無記名で回収。調査内容はフィジカルアセスメントに関して、バイタルサイン・鼻咽喉頭・胸部(肺・心臓)腹部、筋骨格系・神経系の領域を視診触診打診聴診の技術に分け、それぞれ実施回数と自己評価を4段階、基礎看護技術に関して、ベッドメイキング、食事援助、環境整備、経管栄養の管理、排泄援助、清潔援助、体位変換、体位保持、移動、吸入、吸引、酸素療法管理、転倒・転落、外傷予防の技術の項目それぞれ実施回数と自己評価を4段階で記入した。</p> <p>研究対象: 「看護過程とヘルスアセスメントⅠ」を履修した看護学科2年生86名。研究方法: ①授業過程評価スケール(本科目が全て終了した後、調査用紙を配布し無記名で回収)②身体診査自己評価表(情報収集過程演習が全て終了した後提出)③レポート(情報収集過程が全て終了した後提出)を用いて、①と②については基本統計を用い、②の記述部分と③については、理解できなかった点について書いてあるものをそのまま抽出した後、共通性のあるものをまとめた。</p>	2
計	4	9	13

た時の知識と技術の定着状況をビデオ撮影と面接により把握する」といった研究であった。看護職者が対象者である場合は、「訪問看護ステーションの看護師が在宅看護の現場で実施している34のフィジカルアセスメント項目について、その必要度（知識・使用頻度・ニーズの観点から）に関する質問」「高齢者施設の看護師が高齢者をアセスメントする上での困難な点、学びを深めたいフィジカルアセスメント項目についてのニーズに関する質問」といった研究であった。

比較検討を行っていた研究の内訳をみると、学生が対象である場合は「フィジカルアセスメント授業に際して、教員による学生の学習態度（学習課題発見・統合学習・自己学習・対人技術）について3学年分各学年間の比較による差をみる」「フィジカルアセスメント授業後、授業過程評価スケールと自己評価表に関して2学年分の比較による差をみる」「フィジカルアセスメント演習前にテストを行い、人形モデルイチローを使用して演習を行い、その後再度テストを行うことにより、演習前後のテスト結果の比較を行う」ものであった。医療機関利用者が対象である場合は「高齢者のうち、抑制を受けたことのある人と抑制を受けたことのない人に対し、高齢者アセスメント表（MDS）を用いて比較する」ものであった。

V. 考 察

発表年代別において2003年に7件が最も多かった。1996年からフィジカルアセスメントの教育が大学を中心に広まったことにより、教育方法の知見や評価を得ることと、見直しの時期にあたったことで増えたものと考えられる。その後研究論文の数は顕著に増えてはいないものの、フィジカルアセスメントが大学教育を中心に教育されている²⁾ことや臨地の場での研究が始まったことから、今後増えていくことが予測される。

フィジカルアセスメント関連の研究は、教育分野で学生を対象とし、教育評価（知識・技術の定着がどのくらいされているか）を目的としたものが最も多いことがわかった。教育評価として既存の「授業過程評価スケール」や各教育機関で作成した「自己評価表」「技術評価表」「レポート」を対象とするものであった。授業で教えた知識・技術について、授業終了後一ヶ月過ぎてどの程度定着しているかについての実態を把握するもの、モデル人形を使用しての演習を行いその前後のテストの点数を比較するもの、さらに基礎看護学実

習中に実施したフィジカルアセスメント項目が何か、実施困難だったフィジカルアセスメント項目は何か、実施が困難でも知識はあったかについての実態把握等、学生への教育効果を明らかにする研究が多かった。

一方、看護職者を対象とする研究2件は、医療機関利用者を対象とする研究が1件で、高齢者アセスメント表を用いて抑制群と非抑制群の対象者の日常生活活動状況の差を検証するものであった。

以上のことから、臨地の場においてどのようなフィジカルアセスメントが実施されているか、フィジカルアセスメントを現場に適応するための検討課題は何かに関する研究が大変少ないことがわかった。山内が指摘する「教育目標を立てるとき、看護はこうあるべきだという教育者側からの演繹的アプローチと、現場からの現実のニーズという帰納的アプローチがある」⁴⁾を鑑みると、帰納的アプローチがようやく始まったばかりと言える。

看護教育現場でフィジカルアセスメントは着実に導入されているにもかかわらず、臨地の場において未だ十分に導入が進まない現状を踏まえながら、看護職者が現場で必要とするフィジカルアセスメントは何か、スムーズに導入するためにはどのような方策をとったらよいかに関する研究が必要と考えられる。同時に医療機関の利用者は看護職のフィジカルアセスメント力に何を期待しているのか、に関する研究が求められていると考える。

VI. 本研究の限界

医中誌検索サイトのみでの文献抽出であったため、検索サイトに載らないもの、あるいはキーワードの範囲から落ちてしまった文献がある可能性があり、本研究のデータ量として限界がある。今後洩れのないように様々な検索方法で文献を集める必要があることと、2006年の研究動向をみる必要がある。

VII. 結 論

1. 看護におけるフィジカルアセスメント研究は、学生を対象とした教育方法に関連した研究が多く、看護教育にフィジカルアセスメントをどのように導入し、定着させるべきかについて模索している段階であった。
2. 研究対象を看護職者とする研究も2件みられ、臨

地の場でのフィジカルアセスメントについて研究が始まったことが示唆された。

3. 医療機関利用者にとって看護にフィジカルアセスメントが導入されることによる効果に関する研究は見当たらなかった。

引用文献

- 1) 高橋照子編：実践！フィジカルアセスメント，金原出版，東京，2001，p.3.
- 2) 太田勝正，加藤あさか，八尋道子，真弓尚也：わ

が国のフィジカルアセスメント教育の実態－平成11年度全国調査の結果より－，看護教育，41(12)：2000：1060-1065.

- 3) 日野原重明編：フィジカルアセスメント ナースに必要な診断の知識と技術，医学書院，東京，2006，p.iii.
- 4) 山内豊明：看護基礎教育におけるフィジカル・アセスメント教育の存在意義と今後の方向性 看護基礎教育にフィジカル・アセスメントは必要か？ 日本看護学教育学会誌 8(3)：1998：41-52.